

## トーマス・マンの『フロイトと未来』

浜 口 広 之

(独文学)

### „Freud und die Zukunft“ von Thomas Mann

Hiroyuki HAMAGUCHI

*Germanistik*

**Abstract.** Hier wird zuerst Thomas Manns Ontologie behandelt, und dann sein Gedanke über die Zeit. In bezug auf Ontologie ist ein gemeinsames Geheimzeichen „die Einheit von Welt und Ich“ Schopenhauers und Jungs auch das Thomas Manns.

Er sagt, „Tiefe“ von „Tiefenpsychologie“ habe zeitlichen Sinn. Diese „zeit“ ist jedoch für Thomas Mann kreisförmig, zirkulär.

„Die Einheit von Welt und Ich“ wie die zirkuläre Zeit bestimmt nicht nur „die Liebe zur Wahrheit“ und „den Sinn für die Krankheit“, die sein Berührungspunkt mit der Psychoanalyse ist, sondern auch seinen Gesichtspunkt über Nachahmen, Mythen und Feste. Wir wollen, indem wir diese Fragen einzeln analysieren, die Gedanken Manns betrachten, die hinter ihnen liegen.

#### 1. 『フロイトと未来』に於ける存在論

トーマス・マンは1936年5月8日、ウィーンでジークムント・フロイトの生誕80周年を記念して、『フロイトと未来』と題する講演を行なった。これは、講演としては、『リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』(1933年)、『リヒャルト・ヴァーグナーと「ニーベルンゲンの指輪」』(1937年)、『我々の経験からみたニイチェの哲学』(1947年)などとともに、トーマス・マンの思想を研究するうえで、きわめて重要なものの一つである。あるいは、講演のなかでは、最も重要なものと呼んでいいかもしれない。というのは、このなかには、存在と時間に関する、マンの基本的な見解が暗示されているからである。

ある思想家の存在に関する見解、すなわち、その存在論は、しばしばその全思想内容を根本的に規定するものである。トーマス・マンに於いては、それが彼のイロニー観や神話的思考を規定している。

この講演における存在論の特質は、その中で精神分析学のアルファでありオメガである、と規定されているもの、すなわち、「自我と世界との一致」に求めることができる。<sup>(1)</sup>これが精神分析学の核心であると同時に、トーマス・マン自身の存在論の核心でもある、ということ、先ず確認しておくことは、この講演を理解するうえで、不可欠の前提と言えるであろう。仮に、マン自身、この一元論的な存在論に立っているのではないならば、これが精神分析学の核心であるなどと、わざわざ二度も強調するはずはないのである。<sup>(2)</sup>或は、ショーペンハウアーの『個々人の運命における外見上の意図についての超越的考察』<sup>(3)</sup>のような論文を、これほど高く評価することもなかったであろうし、ユングに対する評価も、同様に、これほど高くはなく、また、到底これほど確信的ではありえなかったであろう。何故なら、ユングの思想は、マンがここで引用しているのを見ただけでも、一般の合理主義者なら、学問的に早々と疑問符を付けるはずだからである。しかし、ユングの反合理主義は、この程度ではない。1931年にドレーズデンの精神治療学会の総会で行なった『夢分析の実用性』と題する講演などは、まともな学者というよりは、シャーマンが口にすることに近い、と非難されてもしかた無いような、際疾い内容を含んでいる。<sup>(4)</sup>このような思想を受け入れられる立場というのは、当然のことながら、それ自体反合理主義的で、一般には信じ難い前提のうえに成り立っているものである。それが、主観客観の二元論の揚棄、自我と世界の一致を唱える、一元論的存在論なのである。

## 2. 『フロイトと未来』に於ける時間論

トーマス・マンが、時間を円環的なものと考えていることは、この講演でも、「仮に俳優（としての人間）の現実性が、一回的・現在のなものの中に存在しているとするならば、彼はそもそもどうやって振舞っていいか分からず、支えもなく、途方に暮れて、狼狽し、自分自身への関わり方においても、混乱するであろうし、左右どちらの足を踏み出せば良いのか、どんな顔つきをすれば良いのか、分からないことであろう」<sup>(5)</sup>と、言っているのをみれば、明らかである。「円環的」というのは、要するに、「反復的」、「回帰的」というのと同じことである。

フロイトとの関係で、ショーペンハウアーとユングが、この講演で大きく取扱われている理由も、単に心理学的宿命論において一致しているからではなく、この二人の思想家が、円環的・反復的時間論に立っているからではあるまいか。ショーペンハウアーの『個々人の運命における外見上の意図についての超越的考察』においては、あらゆる現象が、「二番目の顔」を持っていて、夢で前以て、その発生を予見できることが、新聞記事を引用したりして、強調されている。<sup>(6)</sup>ユングもこの種の事件に関しては、膨大な情報を蒐集していて、先に挙げた講演のなかでも、ショーペンハウアーと極めて近い考え方をしていることは、容易に窺える。ちなみに、ユングはショーペンハウアーをよく読んでいます。

## 3. 存在の真理愛に対する関係

トーマス・マンは、自身と精神分析学との親近性を形作っているものとして、真理への愛と、病気に対する感覚との、二つを挙げている。<sup>(7)</sup> 真理とそれに対する愛とは、一元論的存在論においては、特別な位置を占めているので、ここで両者の関係を論じてみたい。それは、マンのこの講演を背後で支えている、思想の体系を予感させるのに役立つであろう。

トーマス・マンの作品の中で、愛について語られたものとしては、やはり、『ベニスに死す』の終章の前に出てくる、「愛する者は愛されるものより神々しい。何故なら、愛される者の中には神はいないが、愛する者の中には神がいるからだ」<sup>(8)</sup> という、ソクラテスをして、パイドロスに対して語らしめる、プラトンの思想と、その解釈が注目されよう。これは、少年愛に関わるもので、真理愛ではないが、作者がこれを秘密の認識として解釈している点、問題なのである。さらに、『非政治的人間の考察』においても、次のような注目すべき認識が述べられている。

「私の青年時代に於ける、真の内実に最も富み、最も実り豊かな経験は、情熱はものがよく見えるということ、そうでなければ、その名に価しないということを知ったことである。」<sup>(9)</sup>

愛、或は情熱のなかには、このように極めて謎めいた、意味深い何かが隠されている。「情熱はものがよく見える」とはいつでも、それが、「何かを一所懸命夢中になってやっている、色々目新しいことに気づいたり、良いアイデアが浮かんだりするものだ」ぐらいの認識なら、誰でも知っていることで、それくらいなら、「青年時代の……最も実り豊かな経験」などと呼ぶはずはない。これは、この現象の背後に、というよりは、この現象とともに生起する、ある神秘的、より根源的な現象に、若きトーマス・マンが気づいていたからに違いないのである。この現象こそ、世界と自我との一致、その神秘的な繋りを予感させるものである。これは、一種の過剰なのであって、この過剰のなかで真性が高まってゆき、認識は嵐となって吹き荒れるのである。ニーチェは、しばしば、この嵐に恍惚となって身を曝したが、ポーも、『ユウレカ!』の中で、この体験を語っている。『ユウレカ!』を読めば、この真性が、同時に、神性に通じることがよく解るであろう。さらに、マルティン・ハイデガーは、この真性について、次のような、極めて厳密な分析を展開している。

「物であろうが人間であろうが、その本質において受入れるということ、それは、それらを愛すること、それらを好むことをいう。この好むということは、より根源的に考えると、本質を贈ることを意味するのである。かかる好みは、能力の<sup>メーゲン</sup>もととの本質なのであって、この能力は単にあれやこれやをやったのけられるというだけではなく、何かをその由<sup>ヘア・クンフト</sup>一<sup>ヴェーゼン</sup>来に於て、『存在』させうる、すなわち、在らしめることができるのである。」<sup>(10)</sup>

私達は神性を、「何かを存在させる可能性」と、定義したい。一般に、この可能性は、私達に気づかれることなく、隠れているが、何かとてつもなく美しいもの、想像を絶するものに遭遇したときなど、はっきりそれと信じられるものである。その最高の形態は、奇跡と遭遇したときであろうが、そもそもその奇跡とは、この世界が存在すること、より厳密に言えば、存在

しうることなのである。奇跡の本質は、何かとてつもないことや想像を絶することそれ自体にくっついているのではなく、そのような形を取って、何かが存在可能であることに存する。

#### 4. 存在の病気に対する関係

病気とは、健康（およそ「健康」などというものが生あるものに存在するか否かはさておくとして）に何か危険なものが付け加わった状態を言う。従って、それは一種の過剰である。過剰であるが故に、それは同時に死とも結び付いている。死は、一般に何かの不足や欠如から起こると考えられている。例えば、栄養、水分、血液、生命力などの。しかし、死はこのようなものの不足だけで起こるのでは決してなく、生有るものの、過剰への意志——このような、不足分以上の過剰な浪費をしようとする意志によって、起こるのである。尤も、それ以外の形で生というものも、存在不可能であるが故に、つまり、生は、常に自己以上であろうとする意志以外ではありえないが故に、逆に、死が不足や欠如の形で現われることは、否定し難いことである。しかし、トーマス・マンが「病気」を口にするときには、常に、この過剰の方を考慮に入れているものと、考えるべきであろう。特に、ニイチェやドストエフスキーのことを語るときには、なおさらそうである。そして、病気の有するこの過剰こそ、真性と神性とを同時に惹起するものである。ニイチェは、病状が進めば進むほど真理に近づき、ドストエフスキーは、病気の発作が起こるときには、いつも神的な状態に陥った。（ちなみに、ドストエフスキーの病気が、「聖なる」病気、と呼ばれていることは、よく知られている。）この、真性と神性とを生起させる過剰が、自我と世界との一致を予感させることは、既に述べた。こういうわけで、マンが、自身と精神分析学との親近性を形成するものとして挙げた、真理愛及び病気に対する感覚は、その根底に於て、一元論的存在論と結びついているのである。

#### 5. 模倣の時間性

模倣とは、常に何ものかの模倣である。何ものかの何か、例えば、その性質、行動、身振り、時にはその運命などの。従って、それが一種の反復であることは、誰でも容易に気づくであろう。トーマス・マンは、この「模倣」というものが、今日この言葉に含まれているよりも、遙かにそれ以上のものであることを指摘しているが、<sup>(11)</sup> これは、「……人間にとっては、再認ということが大切であって、彼は新しきもののなかに古きものを、個人的なものなかに典型的なものを再発見したいのである」<sup>(12)</sup> という言葉にも、呼応するものである。要するに、人間は何か古きもの、伝統的なもの、普遍的なもの、典型的なものなどの遵守、模倣、反復に対する、根強い志向性を持っているのであるが、ユングはこのような人間の態度の背後に、しばしば、特定の文章、ときに格言的であったり、また何処で拾ってきたのかさえ、すぐ分かるような、そういう文章が存在する、と言っている。さらに、それは、文章だけでなく、たった一個の単語であったり、あるいは、尊敬と模倣の対象となるような人物であったりする、というのであ

る。<sup>(13)</sup>

人間のこの模倣癖、反復癖、これは、『ヨゼフとその兄弟達』、特に、その中のヤコブの僕エリエゼルに於て、極端な形で描かれているが、<sup>(14)</sup> 実はトーマス・マンの小説技法そのものにも、反映されているのである。コープマンが指摘しているところでは、マンは小説技法上、発明が極端に少なく、それを隠しもしない。新しい登場人物は、作品のなかに殆ど登場せず、一方では現実から借用したり、他方では前の小説で使われたものを再利用したりする、というのである。<sup>(15)</sup>

また、マルティン・ヴァルザーは、『魔の山』に於ける、次のような驚くべき反復癖を報告している。

この小説の中の特異な登場人物であるペーパーコルン——その描写において、「目が小さくて色つやがないことは15回、額の皺が特別なことは14回、人差し指と親指を曲げて丸を作るとき、それが、『文化的身振り』と呼ばれることが14回、指の爪の先が特別尖っていることが14回、口が『裂けている』ことも14回」繰り返される。さらに、「『威厳がある』ことが13回、髪の色は9回、『威厳があり、どっしりしていて、しかもブーツとしている』と、続けて記されることが8回、彼の『船長の手』は8回」反復せられる、というのである。ヴァルザーは、まだ例を続けていて、ペーパーコルンが「人物」と呼ばれることに至っては、少なくとも、18回はあるという。<sup>(16)</sup> しかし、もうこれ以上引用する必要はあるまい。トーマス・マンの反復癖がどれほどのものかは、これだけで十分理解できる。

これだけ極端な傾向を有しているかぎり、これが偶然であるとか、或は、無意識によるものとは、誰も考えないであろう。「発明」の少ないことに関しては、「詩人を詩人たらしめるものは発明ではなく、魂を吹き込むこと」<sup>(17)</sup> と、マン自身がはっきり言っているのだから、これは明確な意図による小説技法、と断言できよう。

しかし、それにしても、この特異な傾向、とりわけ、『魔の山』に於ける反復癖は、只事とは思えない。トーマス・マンの小説技法に於て、何か特異な傾向が見られるときには、先ず間違いなく、その小説の理念と関わっているのだから、<sup>(18)</sup> 私達は、これを時間論によるもの、と考える。すなわち、円環的時間である。

一般に、詩人は、通常的时间論のなかでは生きていない。ヘルダリーンは、「様々の時間よりも更に古い自然」<sup>(19)</sup> について歌い、ホフマンスタールも、次のように語っている。

「詩人の内部で、現在は筆舌に尽くし難い方法で、過去と織り合されている。彼は、自分の体の毛穴の中に、過ぎ去った人々の、或は遙か昔の決して知られることのない先祖たち、死滅せる幾多の民族、消え去った諸々の時代の痕跡を、嗅ぎ取るのである。」<sup>(20)</sup>

「様々の時間」よりも古く、「消え去った幾多の民族の痕跡」を嗅ぎ取られるような時間、このような時間が、果して、現在と直線上で繋ることができるであろうか。それは到底不可能であろう。唯一の可能性は、重ね合わされるか、ホフマンスタールの言うように、「織り合わされ」

るか、或は、少なくとも、それと似たような形でしか、あり得ない。従って、それは、円環的時間と呼ぶのが適当であろう。円環的時間に於ては、現在は常に、「過去」（これはどの時間よりも「古い」と言わざるをえない）に重ね合わされているか、或は、織り合わされていて、常にその「過去」の反復であり、二番煎じなのである。しかし、私達は好むと好まざるとに拘らず、本質的には、詩人同様、この円環的時間「である」。トーマス・マンの時間概念を分析したティーベルガーも、それが、表面的な日常的自我が考えているようなものではなくて、「生そのものである」ということを指向している、という結論に達した。<sup>(21)</sup>

## 6. 神話における存在

真理愛、及び病気に対する感覚が、体質的にトーマス・マンとフロイトとを結びつけているとするならば、神話は、その両者を結びつける頂点ということができよう。著作に関して言えば、マンにとっては、『ヨゼフとその兄弟達』が、フロイトにとっては、『トーテムとタブー』が、それに当たる。ここで、私達が取扱っている講演、『フロイトと未来』が持たれた時点に於て、既に両著作とも世に出ていて、講演のなかで、その両方に言及されている。<sup>(22)</sup>

トーマス・マンが、古代の人々の特徴として特に注目しているのが、彼らと神話との関係、特に彼らによる、神話の英雄たちの模倣である。ここでマンが持ち出してくる資料も面白いし、クレオパトラ、及びキリスト関する解釈は、出色のものということができよう。資料の中では、スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセーの見解が、特に注目に価する。この哲学者によれば、古代人は何かをする前に、最後の止を加えようと身構える闘牛士さながら、一步後に退く。彼は過去の中に模範を求め、その模範の中に、まるで潜水服を着るときのように、するりと潜り込み、こうして、保護されると同時に姿も変えて、現存する問題の中へ飛び込んで行くのである、と。<sup>(23)</sup>

クレオパトラが、胸を毒蛇に咬ませて自殺したのは、常に一匹の蛇を胸に這わせた小さな立像で知られている、女神イシュタル（エジプトのイーシス）の模倣であり、イエスが十字架上で「我が神、我が神、なんぞ我を見捨て給うや」Eli, Eli, lama asabthani? と叫んだのは、断じて個人的絶望からではなく、救世主の告知である詩篇第二十二番の冒頭にある言葉の反復であった。すなわち、クレオパトラは毒蛇を我が胸に乗せ、イエスは「我が神、我が神、なんぞ我を見捨て給うや」と叫ぶことで、過去の範例を「引用」したのである、と。<sup>(24)</sup>

トーマス・マンの友人で、神話学者であるカール・ケレーニイもまた、ギリシャの祭に於ける牛の犠牲に関して、それが一種の「引用」であることを指摘しているが、<sup>(25)</sup> ちなみに、絶えずこのような「引用」の対象となる原型は、ユングに従えば、繰り返し各民族の夢の中に現われ、しかも、何ら文化的接触の考えられない世界各地で、共通に見られるが故に、遺伝によるものと仮定せざるを得ない、という。<sup>(26)</sup> つまり、夢は遺伝的に「引用好き」だということができるのである。

これらの「引用」、「模倣」、或は、「反復」などの現象には、ある明確な共通性、これらの性質を規定する特徴がある。それは、引用者が引用し、模倣者が模倣するとき、必ず、自ら、過去の範例そのもの「として」、振る舞うということである。トーマス・マンの言葉を借りれば、「神話的同一化」<sup>(27)</sup>が起るのである。それでは、この「神話的同一化」に於ける、「として」の機能は、その本質に於て、一体何を意味するのであろうか。

「として」(als)の機能の本質は、それが、存在の可能性の絶対的条件である、ということに存する。存在は、存在可能であるためには、必ず、「……として」存在することが、不可欠である。神すらも、およそ存在を欲するならば、神「として」存在するしかない。従って、この「として」の無い存在——仮に、それを純粹存在と呼ぶならば、ヘーゲルの『論理学』の命題の正当性を、改めて確認することになろう。曰く、「純粹存在と純粹無とは、同じものである。」<sup>(28)</sup>

それ故、これまで考察してきた模倣、引用、反復などの行為は、存在可能を求める行為であることが解る。何の存在可能かといえ、言うまでもなく、自分自身の存在可能である。しかし、この自分自身、つまり、自我は世界と一致した自我、或は、両者の統一なのである。およそ神話という限り、それは殆ど例外なく、天地創造から始まるのであるが、この現象は、自我と世界との一致を前提して考えない限り、説明不可能であろう。自我と世界との決定的な分裂を未だ経験してなかった古代の人々にとって、天地創造は、文字通り、自分自身の話だったのである。自我であると同時に世界でもある自分自身が、かかるもの「として」、存在を開始したという、火山の大爆発にも比すべき宣言が、天地創造にほかならない。

こうして、神話はその根底に於て、存在及びその可能性によって、決定的に性格づけられている。尤も、凡そ存在するもので、存在によって規定されないものは、何も無いが、神話は、この側面に於て、際立っているといえよう。

## 7. 神話と祭に於ける時間

トーマス・マンは、「引用」の生、神話の生を、「執り行う」「祝う」zelebrierenという単語で説明することによって、それが、「儀式」「祭典」Zelebriationに通じるものである、と主張する。つまり、神話を模倣し、反復し、引用しようとする古代の人々の特質は、祭に於て、最も明確な形で表現される、というわけである。

「祭は時間の廃棄であり、一つの出来事であり、枠付けされた原型に従って演じられる、厳粛な行為なのである。」<sup>(29)</sup>

『ヨゼフとその兄弟達』に於ても、神話と祭との関係は、次のように語られている。

「『かくありき』と、神話は語る。神話は秘密の衣にすぎないが、しかし、その秘密の晴れ着とも言うべきものが、祭である。すなわち、祭は回帰するものであり、時間と時間の断層に橋を架け、かつて存在したものと、やがて存在するであろうものとを、民の意識にありありと浮び上がらせるのである。」<sup>(30)</sup>

このように、これまで述べてきた、古代の人々の神話に対する根本的な関わり方、即ち、「模倣」「反復」「引用」の生は、祭りに於て、最も典型的に、しかも、最も徹底した形で、極めて厳かに執り行なわれるのである。従って、私達がこれらの現象の共通の特質として挙げた、「として」もまた、そこでは極端な形で表現される。それが、祭で用いられる仮面である。トーマス・マンが、「古代に於ては、いかなる祭も、本質的には舞台上の出来事であり、仮面劇である」<sup>(31)</sup>と、言っているのも、驚くには値しない。仮面こそ、「として」そのもの、一個の Als なのだから。だが、同時に祭は、「時間の廃棄」であり、「回帰するもの」であり、「時間と時間の断層に橋を架ける」ものであった。すなわち、祭に於て、人々は現実を離れて、あの円環的時間、回帰的時間へと変身するのである。だが、そのために、何故仮面がわざわざ必要なのであろうか？

私達は、既にホフマンスタールの時間についての考えを引用した際、私達自身がこの時間「である」、という結論に達した。人間は、円環的時間である。より厳密に言えば、人間とは、人間の仮面を着けた、円環的時間なのである。これが、祭に於て、何故仮面がわざわざ必要とされるのか、という問に対する、私達の側からの解答である。

恐らく、この途方もない時間にとっては、仮面の裏側というのが、一番居心地がいいのであろう。だが、彼はそこに、どれほど永く居座っているのか？『ヨゼフとその兄弟達』によれば、人間の歴史は、物質や生命よりも古い、<sup>(32)</sup> というのだから、少なくとも、地球の年齢と考えられている、50数億年よりは古いことになる。人間の歴史が、地球の年齢よりも「古い」、というのは、どう考えても、歴史学ではないし、この「古」さも、歴史学の古さではない。円環的時間は、明らかに、通常的时间とは別の時間である。それは、別の古さをもっている。

この時間を徹底的に考えることが、必要である。これまでの考察から確認、或は、少なくとも、かなりの確実性をもって推察できることをまとめてみると、

- (1) 円環的、或は回帰的であること。
- (2) 通常的时间とは、別の時間であること。
- (3) 私達の魂の深部に存在すること。(マンは、深層心理学に於て、「深層」は時間的意味を持っていることを指摘する。<sup>(33)</sup>) しかるに、この魂は世界と一致している。
- (4) それだけではなく、事件(起こる)と行為(する)との一致の背後にも、この時間がある。
- (5) 神話、或は特に祭りに於て、特徴的であること。

以上のことが指摘できよう。これらのうち、(4)に関しては、まだ全くの推測の域を出ない。この推測は正しいだろうか。

## 8. 「する」と「起こる」

トーマス・マンが、ユングに注目する理由として挙げたものは、『チベットの死者の書』の序文に書かれている次のような観点と、それを表明するときの、著者の平静さである。



「それを、私がどのようにするかを観察するよりも、それが、私にどのように起こるかを見ることのほうが、ずっと直接的で、目につきやすく、印象深い。それゆえ、ずっと説得力がある。」<sup>(34)</sup>

マンによれば、「起こる」ことは「する」ことだと、事もなげに暴露しているこの考えは、実は、向こう見ずで、とてつもない考えであって、ショーペンハウアーは、未だこれを恐ろしい要求、「過度の」思想的冒険と、思っていたという。そして、マンはこれを、フロイトの影響と考える。つまり、言い間違いや書き間違い、失錯行為の全領域、病気への逃避、自己処罰欲求、災難の心理学等、無意識の魔術についての分析が、確認し明るみに出したいっさいのものがなければ、ユングのこのような思想的冒険は、およそ考えられない、というのである。<sup>(35)</sup> 確かに、「起こる」ことは「する」ことだというこの考えは、これらの分析の結果を踏まえていて、その直接の延長線上にある、と言えよう。だが、一方で、ユングが収集した膨大な資料、ショーペンハウアーも持ち出している夢が正夢となるような例は、<sup>(36)</sup> それが多ければ多いほど、その量だけでも、語られたことの直実性を疑うのが難しくなってくることも、事実である。夢が寸分違わず正夢となる、この信じ難いような例は、実は資料として、膨大な量が集められ得るのであって、その膨大な例を前にすれば、誰しも、この私達の人生が、細部まで「前以て」余すところ無く決定されていて、「以前の」時間が正確に回帰してきたのではないか、と疑わざるをえないであろう。そして、いったんこのような視点を受け入れてしまえば、時間が直線的なものであり、私達の現実が、一回的・現在的なものに根差しているとする通念が、逆に、いかに根拠に乏しく、いかに突拍子もない空想の産物であるかに気づくのに、さして時間はかからないであろう。ユングの大胆な思想の背後にある平静さには、単にフロイトの影響によるというのではなく、それなりの情報量の裏打ちがあった、と考えるべきである。

「する」ことと「起こる」こととの一致の背後には、このように、円環的時間を想定せざるを得ない。それは、私達の生が決して一回的なものではなく、反復の生であることを語っている。「かつて」たどられた道であるが故に、私達の「する」ことは、全て「かつて」なされたことの反復である。つまり、それは行為ではなく、事件なのである。すなわち、それは「する」ことを意味せず、「起こる」ことを意味している。

だが、ここで「反復」とか「回帰」、或は「かつて」とか「前以て」とかの言葉をもう少し厳密に検討しておく必要があるだろう。直線的時間のなかでの思考に慣れている、というよりも、この種の思考しか一般にしたことのない私達にとって、これらの言葉も、この時間のなかでのこと、と理解しがちである。しかし、「円環的時間」と私達が呼んでいるものは、この現実の直線的時間とは、「別の」時間である。従って、「前以て」といっても、それは決して過ぎ去った昔を意味しているのではなく、むしろ現在というものの性質と呼んだほうが、いいかもしれない。「反復」にしても、全く同様である。それは、一回目か二回目か、といった回数で表わすことは、決してできない。これも、唯一度しかないこの生の性質、というほうが当たっている。つまり、唯一度のこの生は、自己自身の複数的性質を有している、と。このように考えれば、私

達の人生は、その隅々まで運命によって決定されているのだから、それに黙って従うしかない、といった考えが、いかに見当外れのものか、理解できよう。私達の運命が、どのようなものになるかを決定するのは、言うまでもなく、現在の、この瞬間である。それを偉大と為し得れば、「かつて」も偉大だったことになるであろう。つまり、ここでは、一般に相反するものと考えられている、運命と自由意志とが、一致するのである。最高に自由なものこそ、運命的であり、運命こそ、最も自由なものである。これこそ、円環的時間の紡ぎ出す生にほかならない。

思うに、古代の人々は、現代人よりも、このことをよく知っていたように思われる。彼らは、「模倣」を少しも恥とせず、むしろ、神話の英雄を模倣することによって、自己自身のアイデンティティを見出していた。トーマス・マンの言うとおりに、彼らにとって、「神話は人生の身分証明書」<sup>(37)</sup> だったのである。しかも、アレキサンダー大王が神話のアキレスに憧れて、アレキサンダー大王その人となったように、そして、彼の神話の英雄との一体化への自由な意志こそ、彼の唯一の運命となったように、この偉大な王の「行為」(する)こそ、「事件」(起こる)と呼ぶにふさわしいものであった。

## 9. 世界の与え手としての魂

世界が魂によって与えられている——これは、形而上学者ショーペンハウアーと、心理学者ユングの秘密であり、また、ヨゼフの内部では、この秘密が、「軽やかで、ふざけげみで、芸術的で、明るく、はったりげみで、オイレンシュピーゲル風」<sup>(38)</sup> に描かれる、とマンは言う。この秘密は言うまでもなく、最初に「自我と世界との一致」と呼ばれ、精神分析学のアルファーであり、オメガであると規定されたものと、同一のことを指しているのは言うまでもない。精神分析学では、自我というのは、魂(エス)の上にちょこんと乗っかっている、小さな付属器官とも言うべき、一種の排出孔に過ぎないから、言わんとしていることを表現するには、「自我」という言葉よりも、「魂」という言葉のほうがはるかに適切である。いずれにせよ、私達は「自我(魂)と世界との一致」から出発して、また再びそこへ帰ってきたのである。私達が存在する限り、この一種の円運動は、必ずついてまわる。これは、存在するもの全ての基本的な構造だからだ。文学論文の基本的な使命からは多少外れるかもしれないが、トーマス・マンのこの講演を理解するためには、ここで存在の基本的な構造分析をしておくことは、どうしても避けることができない。

私達の住んでいるこの宇宙は、ビッグ・バンによって生じた、といわれている。それ「以前」にはなにも存在せず、それ故、時間も流れていなかった。「以前」に括弧が付いているのは、時間の流れのないところを「以前の」と呼ぶことは、実際にはできないからである。)しかし、宇宙がビッグ・バンにせよ、或は、それ以外の何によって生じたにせよ、それが生じた限りは、それが生じる可能性そのものは、宇宙自体に「先立って」、存在していなくてはならない。何故

なら、生じる可能性のないところには、何も生じ得ないからである。従って、この可能性は、宇宙「以前」に存在している。しかし、それ「以前」には何も存在せず、時間さえ流れていなかったのだから、この「以前」は、宇宙自体とともに存在し始めるしかない。こうして、宇宙は存在を開始したその当初から、通常の過去とは全く「別の」「以前」を、備えているのである。ここで、「備えている」といったが、これもあまり正確な表現とは言えない。むしろ、宇宙はこの「以前」「である」、或は、この「以前」を存在している、と他動詞的に表現したほうがいいかもしれない。

ところで、この「以前」を「生じる可能性」と呼んだが、実際には可能性だけで生じるわけではなく、実際に生じた限りは、その存在可能への、一種の指向性のようなものがあつた、と考えるべきである。宇宙は、それ故、私達の住んでいるこの世界、そして、そこから生れた私達自身もまた、この指向性「である」。この普遍的な存在こそ、ショウペンハウアーやニイチェが「意志」と呼んだものに外ならない。この「意志」は、注目すべき構造を備えている。宇宙、即ち存在者(の全体)は、この「意志」、すなわち、存在可能への指向性「から」生じた。そして、現にそれ「で」ある。そして、「で」ある、ということは、存在可能「への」指向性であることを意味する。しかるに、この「存在可能」の「存在」が、もともと存在可能への指向性なのだから、この指向性は、指向性への指向性である。存在者はその存在に於て、この指向性「から」生じ、この指向性「で」あり、この指向性「へと」指向する指向性である。そして、この「から」「で」「へと」によって表わされる自己回帰の構造を、私達は円環的時間と呼んだのである。この分析は、その対象となる構造そのものが、きわめて複雑なので、言語的にも難解になってこざるをえないが、たいていの思想が、ここで挫折したり誤ったりしていることを考えれば、厳密に分析される必要がある。例えば、ニイチェはせつかく永却回帰の現象を発見しておきながら、この指向性を、周知のごとく、「力への意志」と規定することによって、見事にこの指向性の本質を見誤ってしまった。「意志」が「永却に」回帰するのは、実際は「力へ」ではなく、自己自身へ、なのである。

もう一度整理しておこう。世界は「意志」である。しかも、この意志「から」生じ、この意志「で」あり、この意志「への」意志として、そうである。これは、存在するもの全ての本質的性格であるから、私達の魂もまた、例外ではない。否、私達の魂こそ、この存在の本質的な性格を、最も忠実に引き継いでいるのである。私達の魂は、通常の時間とは全く「別の」、この「から」「で」「への」という構造をもった円環的時間「を」存在している。あるいは、この時間「である」。そして、それは単に私達の自我に所属しているのではなく、この宇宙、或は、世界を存在可能たらしめる、当のものである。この魂の世界は海に齊しく、私達の自我とは、その上で戯れる小さな波頭のようなものであるが、心理学はこの広大な闇を、「エス」とか「無意識」とか呼ぶ。しかし、それはビッグ・バンに際して、「既に」宇宙の存在に「先立って」いたのであり、その「古さ」は、通常の時間概念を軽々と越えるような、何かぞっとするような

古さなのである。この「古さ」を有する時間にとっては、ビッグ・バンなど、あるいは、ごく最近の出来事に過ぎないのかもしれない。

何れにせよ、この闇を魂と呼ぶならば、世界は紛れもなく、この魂の所産である。何故なら、それは全ての存在者に「先立つ」その存在の可能性、あるいは、より厳密に言えば、その可能性への指向性であるから。従って、およそ存在するものであるかぎり、全てのものが、ここを己の故里とせざるをえない。こうして、ショーペンハウアーとユングとの秘密——世界が魂の本質からして、与えられており、しかも、その魂は私達自身のうちに住んでいる、というこの思想は、それが常識から見て、いかにとつてもない思想的冒険であったとしても、やはり、十分な根拠を有していることが理解されよう。

#### 10. 『フロイトと未来』の思想

この講演のなかで語られた、トーマス・マンの思想は、これでほぼ全て、説明され得たと思う。これらは、全てその根底に於ては、一つの認識に由来している。それは、この現実の世界が、一つの魂によって存在せしめられており、その魂は、私達自身のうちにも住んでいて、円環的時間によって支配されているのだが、それは、同時にこの魂が造り出した世界をも支配している、というこの認識である。これは、確かに、いかなる常識的な観点をも踏み越えるもので、たいていの人には信じられないことかもしれない。しかし、トーマス・マンの思想に関するかぎり、『魔の山』あたりから、この時間論が、それを理解する鍵となったように思われる。

#### 注

- (1) これが、『フロイトと未来』を理解する条件であるばかりでなく、トーマス・マン文学理解の重要な鍵であることは、既に強調した。  
浜口広之「トーマス・マンの『ファウスト博士』におけるイロニーと時間」『高知医科大学紀要』第1号、29-41 (1985)／第2号、15-34 (1986)
- (2) Mann, Thomas: Gesammelte Werke (Jetzt abg. GW) IX. Frankfurt am Main 1974. S. 479 u. 488
- (3) Schopenhauer, Arthur: Transzendente Spekulation über die anscheinende Absichtlichkeit im Schicksale des einzelnen. In: Sämtliche Werke Bd. IV. Stuttgart/Frankfurt am Main 1965. S. 245-272
- (4) Jung, Carl Gustav: Die praktische Verwendbarkeit der Traumanalyse.  
この講演は後に同学会誌に発表された。現在は全集第16巻に収録されている。  
Jung, C. G.: Gesammelte Werke 16. Bd. Praxis der Psychotherapie. 4. Aufl. Olten 1984. S. 148-171
- (5) GW IX. S. 494
- (6) ibid. S. 247
- (7) GW IX. S. 480ff
- (8) GW VIII. S. 492
- (9) GW XII. S. 73ff

- (10) Heidegger, Martin : Brief über den » Humanismus «. In : Wegmarken. Frankfurt am Main 1967. S. 148
- (11) GW IX. S. 496
- (12) GW IX. S. 492
- (13) Jung, C. G : Seelenprobleme der Gegenwart. 5. Aufl. Zürich 1931. S. 347
- (14) Mann, Thomas : Joseph und seine Brüder. GW IV.
- (15) Koopmann, Helmut : Der schwierige Deutsche—Studien zum Werk Thomas Manns—Tübingen 1988. S. 3
- (16) Walser, Martin : Ironie als höchstes Lebensmittel oder : Lebensmittel der Höchsten. In : Thomas Mann. Hrg. v. H. L. Arnold. München 1976. S. 12
- (17) Mann, Thomas : Bilse und ich. GW X. S. 15
- (18) この点についても、『ファウスト』博士論のなかで分析した。注(1)参照。
- (19) Hölderlin, Friedrich : Wie wenn am Feiertage ... In : Werke und Briefe. Bd. 1. Hrg. v. F. Beißner u. J. Schmidt. Frankfurt am Main 1969. S. 135
- (20) Hofmannsthal, Hugo von : Der Dichter und diese Zeit. In : Gesammelte Werke in Einzelausgaben. Prosa II. Frankfurt am Main 1976. S. 245
- (21) Thieberger, Richard : Der Begriff der Zeit bei Thomas Mann. Baden-Baden 1952. S. 96
- (22) GW IX. S. 490, 492 u. 493
- (23) GW IX. S. 495ff
- (24) GW IX. S. 497
- (25) Kerényi, Karl : Antike Religion. München/Wien 1971. S. 42
- (26) Jung, C. G : Gesammelte Werke 11. Bd. Zur Psychologie westlicher und östlicher Religion. 5., vollständig revidierte Aufl. Olten 1988. S. 67ff  
引用部が含まれている, 第I章「心理学と宗教」は, イェール大学に於ける, テリー講座での英語の講演(1937年)をもとに, ドイツ語に直して加筆, 修正したものである。
- (27) GW IX. S. 496
- (28) Hegel, G. W. F : Wissenschaft der Logik. I. Buch, WW III. S. 74
- (29) GW IX. S. 497
- (30) GW IV. S. 54
- (31) GW IX. S. 497
- (32) GW IV. S. 39
- (33) GW IX. S. 493
- (34) GW IX. S. 488
- (35) GW IX. S. 488
- (36) Vgl. (6)
- (37) GW IX. S. 496
- (38) GW IX. S. 498

(1990年9月6日受理)